

<書評>

日本人の原爆投下論はこのままでよいのか —原爆投下をめぐる日米の初めての対話 ハリー・レイ & 杉原誠四郎 (レキシントンブックス 2019)

評者：タダシ・ハマ

さまざまな責任のなすり合い

本書「日本人の原爆投下論はこのままでよいのか—原爆投下をめぐる日米の初めての対話」の第一の目的は、米国が日本に原爆を投下したことにに関して、解説と弁護をすることである。原爆を投下して日本を屈服させなかったならば、上陸作戦を行わなければならなかったはずだ。その場合、どれほどに米国人が死ぬことになったかを考えてみるがよい、というのである。著者のハリー・レイは、頑迷な日本政府が最後の一人まで戦い抜くと誓っていた以上、他に選択肢はなかったと主張する。本書の刊行に際してレイが望んだことは、「原爆に関して対話をする」ことだった。それも「バランスの取れた対話」をしたいと望んだのであり、「占領中に強行した東京裁判のような、勝者が敗者に押し付けた一方的な断罪になってはいけない」という態度だった。

彼は、バランスの取れた対話によって歴史認識を正そうと訴える。そして、「東京裁判」を再現してはいけないと言いながら、まず冒頭で、日本が「人道に対する言い訳のできない罪を犯し続けた」と誹謗し、とりわけ、韓国人女性を強制的に「売春婦」いわゆる「慰安婦」にしたこと、「南京大虐殺」を行ったことに言及する。日本の戦争犯罪を「これでもかこれでもか」と列挙するこの方針は本書の始めから終わりまで貫かれている。著者は一体どんな人物なのだろう。一方で日本人を「戦争犯罪人」呼ばわりし、他方では「バランスの取れた対話」をしたいというのだから、正気の沙汰とは思われない。いわゆる「慰安婦」と「南京大虐殺」は、まだまだ歴史の研究課題であるし、日本語の書籍では頻りに取り上げられている。しかし、英語国民、特に米国人と、このような歴史的問題について「バランスの取れた対話」をしようというのは無意味なことだ。いわゆる「慰安婦」や「南京大虐殺」を徹底的に検証した書籍は皆無に近いからである。少なくとも、日本語で書かれた書籍の数とは比較にならない。¹ 日本人は英語国民に世界に対して、事実を突きつけて対決しようとしないのだろうかとは私は歯痒い思いを払拭できない。対決するのを億劫がっているように見えるのだ。それは、一つには、喧嘩を嫌う外交の歴史が長いからであり、また一つには、慣習として協調関係を大切にしたいと思う国民なので、「感情」を害しかねない厳しい

¹ 最近英訳された慰安婦問題について総括的な研究書としては秦郁彦著 *Comfort Women and Sex in the Battle* by .Hata Ikuhiko (ハミルトン・ブックス)、『慰安婦と戦場の性』(新潮社)がある。

真実を語ることをためらうのである。本書が冒頭から、「バランス」などは歯牙にも掛けていないことに、読者はすぐに気づくであろう。

レイは、日本が「罪を犯し続けた」ことを含めて、本書に示された見解は、自分の個人的見解だと述べている。そうではあるまい。彼の意見は、たいていの米国人と同じことを鸚鵡返しに言っているとしか思えないのである。（率直に言って、こんな本が出たからと言って、「日本が原爆を投下されたのは当然の報이었다」と考える米国人の気持ちが変わることはありえないだろう。また、日本人の中にも、原爆も太平洋戦争が起こったことも全て日本の責任だと考えている者が少なくないが、そういう人も本書を読んだからといって改心することはないだろう）² パールハーバーの「騙し討ち」の以前から、米国人にとって、日本人は「人間以下」の存在だったのである。³ こんなふうに、米国人はアジアを西欧化しキリスト教化すれば異教徒を浄化することができると考えて、労苦をいとわず取り組んで来たが、その一方では、異教徒が米国に移住してくることを禁じたのである。ルーズベルトはパールハーバーを「正当な理由のない卑劣な攻撃」と呼んだ。その後ではなおさら、米国人は日本人という敵を、「薄汚い卑劣なイエローモンキー」と看做すのにためらいがなくなった。まだ十代の若者だったレイもその範に洩れなかった。米国は日本との戦争に引きずり込まれたのであり、願いはただ恥を雪ぐことだけだった——有色人種に二度とこんなことをされてたまるか！ 太平洋の米軍は国民から歓呼の声を浴び、米国のメディアは国民の心に憎悪の念を刻み付けた。

レイは、「米軍は投降兵を捕虜にしないこともあった」「米国軍人は非人道的なふるまいをしたこともあった」「GI（と海兵隊員は、『投降した日本兵を殺すな』という将校からの命令を無視したこともあった」と述べている。事実はどうていそんなものではなかった。

² 本書はまた、米国が原爆を投下したことについて、日本人がどう考えているかを考察している。杉原誠四郎のエッセイは、バラク・オバマ大統領が2016年に広島平和公園を訪問したことによって、「米国人は原爆の呪いから解放された」と示唆している。罪を赦されたいのだろうが、米国人の方はそんなふうには思っていない。また、オバマは核兵器のない世界を実現しようと訴えたが、うつろに聞える言葉だった。なにしろオバマは、広島に来る前に、米国の核兵器近代化のために3兆ドルの予算を要求していたのだから。ノーベル平和賞受賞者が、広島に始まる核兵器軍拡競争を続けようとする主張するとはあきれられるばかりだが、不思議に日本人は納得してしまっているらしい。

³ スミソニアン博物館のアレッシュ・ヘリチカは、フランクリン・D・ルーズベルト大統領に、こう忠告したことがある。「日本人の極悪非道で好戦的な性格は、頭蓋骨の発達段階が我々より2000年遅れていることに起因している」と。FDR（ルーズベルト）は、日本人がヨーロッパ人と交配しても何の益もないと信じていた。まして、交配したから、「先天的な野蛮な」正室が改まるとは考えられないと思っていた。FDRは、副官にある中国の寓話を語って聞かせたことがあった。それは、「日本民族は、中国の王女と日本の狒々との混血から生まれた」というものだった。ロビンソン・G(2001) *By Order of the President*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

軍の最高レベルでは兵士たちに、「ジャップを殺せ」「もっとジャップを殺せ」という命令していた——米軍の指揮官だったウィリアム・ハルゼー提督がこのような命令を発していたことをレイは指摘している。しかも、それだけにはほどまらなかった。ハルゼーは、「もっと殺せ。日本語が地獄でしかはなされることないようにしてやれ」とまで放言した。ある海兵隊の大佐は、投降兵を捕虜にしないように命令した。「黄色い(サノビッチ)はみんな殺してしまえ。それだけだ」と言っていたのである。米軍の将校がこんなことを言っていたのだから、「非人道的行為」が大手を振ってまかり通っていたことがよく分かる。

本書は、チャールズ・A・リンドバーグの『孤高の鷲——リンドバーグ第二次大戦参戦』から引用している(Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1970)。この参戦記には、米軍が日本兵に対して行った虐殺の記録が記されている——それも「ときどき」などというレベルのものではなかった。リンドバーグは1944年に、民間人顧問として太平洋の戦地を巡って旅行したが、将校たちから、日本人は「本当に野獣よりも下等な動物だ」という言葉を聞いたという。「日本人は絶滅させなければならない」とも聞いたのだった。また別の時には、陸軍の航空将校の一人が、「日本人将兵のうち、少数者だけが捕虜になっている」ことに触れて、「捕虜をもっと捕まえようと思えばわけもないことだ。しかし、我が軍の兵士たちは、捕虜なんか要らないと言っている」捕虜が多すぎると「事故」も起こる。ビアク島(ニューギニア)の戦いでは、「一握り」の日本人将兵が断崖に立てこもったために、米軍の砲兵隊はこれを撃退するのに数週間も手間取った。リンドバーグは述べている。「日米立場が逆になって、我が軍がこんなに勇敢に見事に持ちこたえ場合のことを考えてみるがよい。よく頑張った、勇敢だった、犠牲をいとわずに防衛したと絶賛されていたに違いない。しかし、私がこの耳で聞いたことであるが、司令部でぬくぬくとしている米陸軍の将校たちは、この素晴らしい日本人兵士のことを「黄色い畜生」と平然と侮辱するのである。彼らの願いは、日本兵を無慈悲に残酷に全滅させることである。ここに来て以来、敵に敬意を払ったり同情したりする一片の言葉も聞いたことがない。4 そのうちに、歩兵部隊が日本軍橋頭堡を占領して、一人を捕虜にした。しかし、後になって、さる将校がこの事実を修正した：「一人も捕虜にはしなかった」5 というのである。その後、太平洋の他の場所で将校たちと話していた時、リンドバーグは、海兵隊員や兵士は「日本軍の降伏をめったに認めない」6 のだということを知った。兵士たちは「ジャップを殺す」「もっとジャップを殺す」だけでは満足せず、死体の手足を切断して、土産にしたともリンドバーグは聞いた。その将校は、自分がそれを止めたかどうかについては何も言わなかった。語るに落ちるとはこのことだった。7

⁴ Lindbergh, p. 879-880.

⁵ Lindbergh, p. 880, 881.

⁶ Lindbergh, p. 915.

⁷ 死者ばかりでなく負傷者も同じだった。E・B・スレッジ「ペリリュー・沖縄戦記」 ニューヨーク、ニューヨーク：Presideo Press 1944年1月に統合参謀本部から、そのような死体損壊を禁ずる指令が出されたが、気にも留められなかった。陸軍法務総監は、そのような死体損壊

作家のトーマス・グッドリッチの指摘する所によると、米軍は日本兵を憎み、投降して来ても射殺するようなことをしたのであるが、その動機は、日本側の虐殺を自分の目で見たからではなく、その噂を聞いたからに過ぎなかった。あるGIは「私は一人も降伏させなかった。私の仲間は誰しも同じだった」と告白した。⁸ グッドリッチはこう説明した。「日本兵は、息を吞んで目を見張り、ややあってから、非武装の仲間が虐殺されたことを証言した」 また、日本人兵士は、降伏すると殺され、死体を切り刻まれて戦利品にされると知ってから、「いよいよ降伏しようとは思わなくなった」とも述べた。⁹ グッドリッチはさらに指摘した。「太平洋戦争とは、戦争ではなく狩猟だった。「薄汚い動物」を狩り立てて、できるだけたくさんを殺す狩猟だった」と。¹⁰

リンドバーグは苦い顔でみんな偽善だと語った。「敵が虐殺をしたという話は耳に胼胝ができるまで大声で叫び立てる。それなのに、自分たちが犯した虐殺は隠蔽し、向こうが先にやったから復讐したまですと自己弁護する」¹¹ こういうわけで、リンドバーグの見聞によると、虐殺をしたのは「若干名」の米軍人だけだったわけではなかった。また、その行為を容認したのは「若干名」の米軍将校だけだったわけではなかった。

本書によると、原爆投下は是認される。投下しなかったら、日本は決して降伏しなかったであろうから、というのである。日本の軍部は、国が滅んでも降伏はしなかったであろうと読者は聞いておられるだろう。しかし、1945年夏のそのような狂気は、ほぼ軍部だけのものだったと言えよう。日本の兵士たちは本当に勇敢に戦った。しかし、戦争末期になると、たいていの若者は、少しでも生きる望みがあるのなら、死という結末を迎えたくはないと考えるようになっていた。¹² 日本のさる退役軍人は「名誉ある降伏ができるものだったら、みんなが降伏していただろうに」と語った¹³。戦争末期には、食料も尽き、空輸も来なくなったが、日本人兵士は特に狂瀾状態に陥った様子ではなかった。ある兵士は語った。「誰が敵のことなど気にするものか。敵だって、こちらに食料がなくなっているのだから、戦う気力がないことくらい百も承知していたのさ。我々にとっては、戦争なんかどうでもよくなっていたんだ」¹⁴

は戦時国際法に違反する（つまり戦争犯罪を構成する）と指摘した。（J・J・ウェインガートナー(1192)） *Trophies of war. The Pacific Historical Review* 61: 53-67

⁸ Goodrich, T. (2018). *Summer, 1945*. Siesta Key, FL: The Palm Press. p. 18. グッドリッチ・T(2018) 「1945年夏」

⁹ Goodrich, p. 19.

¹⁰ Goodrich, p. 25.

¹¹ Lindbergh, p. 880.

¹² Goodrich, p. 18.

¹³ Goodrich, p. 20.

¹⁴ Goodrich, p. 19.

原爆投下がやむを得なかった理由がもう一つある、とレイは語る。それは米国人の生命を救うためには原爆が必要だったということだ。トルーマン大統領は、表向きには、原爆を投下すれば日本を降伏させることができる。そうすれば、11月に予定されていた上陸作戦が必要なくなり、多くの米兵の命が救われるというのである。レイは別の試算をしている¹⁵——「九州に侵攻すれば、米兵の死者は25万から30万に及ぶ(p.22 & p.26)」「25万ないし30万の人的被害が出る(p.29 & p.38/原文では「人的被害=casualties」がイタリックになって強調されている)」「25万ないし30万と推定される米国軍人の死という人的被害が出る(p.76)」あるいは「海軍と海兵隊と陸軍を合計して、17万5000ないし20万の生命が失われる可能性がある(p.177)」。レイはまた、ハーバート・フーバー大統領が、50万ないし100万の「人的被害」が出ると予測したことを指摘する。トルーマンは、原爆投下によって、「50万の人命」が救われたと述べた。¹⁶しかし、レイが引用する数字は、作家のロバート・リフトンやグレッグ・ミッチェルが「戦後の捏造」と呼んだ後知恵である。トルーマンが退職する際には、この救われた米国人の生命はさらに増加した——「救われた生命が多ければ多いほど、(トルーマンの)功績は大きくなる」という理屈である。¹⁷リフトンとミッチェルは、さらに、「ある時点から、50万という数字が確定されてしまった。丸い数字であったこともあり、トルーマンが何をしたか、なぜそれをしたかに関して、神話を形成するのに役立ったという皮肉が感じられる。¹⁸

当時のトルーマン政権は、人的被害に関する、この膨れ上がった恣意的な数字をさらにどんどん拡大して行った。戦後になっても、ヘンリー・スティムソン国務長官はこう書いている。「私が受けた報告では、そのような作戦(上陸作戦)が行われたならば、米軍だけで100万以上の人的被害が出ると予想される、ということだった」¹⁹リフトンとミッチェルは、「この恣意的な人的被害の数字を、誰から『報告』されたかを明らかにしなかった」と指摘している。²⁰ずっと後になると、原爆投下によって「救われた」生命の数値は百万単位の途方もないものになって行った。²¹

この頃、日本に対する「全面的侵攻作戦」が行われていたら、どのくらいの人命が犠牲になったかについて、米国の統合参謀本部はどのように予測していたの

¹⁵ 人的被害の引用については、「人的被害」(casualties)という用語が、死者と負傷者の合計を指すのか、それとも死者数だけを指すのかはよく分かっていない。レイは死者だけ「25万ないし30万の損害」と言っているので、死者だけのことを言っているようであるが、後の方では、そのいずれであるかがはっきりしなくなっている。

¹⁶ Lifton, R.J. & Mitchell, G. (1995). *Hiroshima in America*. NY, NY: Avon Books. p. 179. R・J・リフトンおよびG・ミッチェル 「アメリカの中の広島」 ニューヨーク、ニューヨーク: Avon Books p.179

¹⁷ Lifton & Mitchell, p. 180.

¹⁸ Lifton & Mitchell, p. 180.

¹⁹ Lifton & Mitchell, p. 109.

²⁰ Lifton & Mitchell, p. 109.

²¹ Lifton & Mitchell, p. 181.

だろうか。その数値は今では分からなくなっている。歴史家のバートン・バーンスタインによると、1945年6月に書かれた報告書では、人命の損失を25000ないし46000としている。²²ここに奇々怪々な事実がある。陸軍参謀総長ジョージ・マーシャルは、この報告書の結論をスティムソンに知らせていた。ところが、スティムソンは戦後になってから、「100万超」の人的被害が予想されていた、と述べたのである。²³

人的被害の予測数値が1000であろうと100万であろうと、原爆によって米国人の生命が救われたことに変わりはない、と主張する人もいよう。現に、太平洋方面の軍関係者たちは、広島に原爆が投下されたと聞いて、欣喜雀躍とまでは言わないまでも、安堵の吐息を漏らした。「神よ。原爆を下さったことを感謝します」と言ったとのこと。²⁴米国人は死の種子を撒き散らして自分たちの生命を救い、後ろめたい気持ちでそれをお願い致しますと祝ったのだった。²⁵本書は、原爆によって救われたのは米国人ばかりでなく日本人も同じだったと主張する。類書にもその類が多い。日本の軍部は「本土決戦」を覚悟していた。これによって、米軍に一撃を加え、「譲歩を引き出す」という目論見だった。ところが、原爆投下によって、米軍はその危機を回避することができたというわけである。

しかし、8月6日直前の日本軍の実状、日本の工業力の実状を勘案してみると、日本が米国の軍事機構に重大な損害を与える能力があったとは考えにくい。7月末から8月始めにかけての九州の日本軍兵力は50万から90万、さらに予備役の民間人が1000万もいたということである。本書を読むと、百戦錬磨の米兵との戦いに駆り出された民間人の中には、13歳から60歳までのまだ徴兵されていなかった男子、および17歳から40歳までの女子が含まれていたということが分かる(p.75)。

さらに、海軍がカミカゼ攻撃隊を組織していたことを本書は教えてくれる。部隊の数も多数であり、航空機は10000機にのぼった。これは「日本航空兵力のほぼ全部であり、しかもみな九州防衛のために配備されていた(p.78)。戦争末期に日本軍がどんな悲惨な状況に陥っていたかはすでに述べた。本書(p.82)を読むと、本土防衛とは言っても、現実の潜在的防衛力がどの程度のものであったかがよく分かる——レイは、どの点から見ても、日本は、手の打ちようがなくなっただい

²² リフトン&ミッチェル p.274 バートンはまた、陸海軍参謀長ウィリアム・リーヒー海軍大将の日記には、「人的被害は63000を超えない」と書いてあると述べている。(リフトン&ミッチェル p.293)

²³ さらに奇妙なことは、マーシャルは、6月18日に、米国統合参謀本部(US JCS)およびトルーマンとの会議に於て、「九州に侵攻した場合、損失(losses)はゆうに20万をこえるであろう」との計算を示した。

²⁴ Lifton & Mitchell, p. 237.

²⁵ 日本が降伏した後、米国民の23%が、日本に原爆をもっとたくさん投下すべきだったという意見だった。(Goodrich, p.183)

たのである」と述べている。民間人の戦力は、農具で祖国を守ることになっていた。「竹槍・弓矢・さらには旧式のライフルだった」(p.75) 日本政府は「原料がないから航空機も軍需品も生産できなくなっている」と発表していた。²⁶ 栄養不良と飢餓が「非常に深刻」な事態に立ち至った。都市が徹底的な爆撃を受けたために、交通網も通信網も「窒息状態」になっていた。食料は不足し、海軍の艦船は壊滅し、兵士には武器が行き届かなかった。さらに、亡国の兆しとして、厭戦気分が蔓延し始めた。本書では始めの方で、米軍が上陸して来た場合に備えて、「1000機の航空機」が迎撃の準備を整えていたと述べているが、一方、6月になる頃には、日本海軍は石油の供給が尽きてしまい、航空燃料がないために、3月に採用した航空隊の新兵を訓練することもままならなくなっていた。

春から初夏にかけて、こんな状態になっていたのだったら、日本の航空機や艦船はいったいどうやって米軍に特攻攻撃をかけることなどできるはずがあったろう、と首をかしげたくなる。カミカゼ航空隊が、1944年から1945年初頭にかけて、米軍兵士を恐怖のどん底に陥れたことは間違いない。しかし、他のカミカゼ部隊、たとえば魚雷を搭載した二人乗りの潜水艦(海龍)や人間魚雷(回天)などは、米軍の軍事機構に対しては螻蛄の斧を振り上げた程度の効果しかもたらさなかった。²⁷

レイの歴史観には興をそそられる所がある。なんと、ソ連の参戦が日本の降伏を促した効果はなきに等しかったと言うのである。だからこそ、二発の原爆が必要だったという結論になる。しかし、それとは正反対の意見も聞かれる——ソ連の宣戦布告こそが日本が降伏する決定的要素になったという意見である。米国人が、こういう微妙な問題を理解するためには、よくよく当時の国際関係を整理してみなければなるまい。第一に日ソ関係がどういう状況にあったのかということであり、第二には1945年2月のヤルタ会談でルーズベルトとスターリンがどういう密約をしたのかということである。ところが、本書ではそういうことについての説明が欠けている。読者は別の本を参照しなければならないというわけだ。²⁸

²⁶ ジョン・トーランド(2003) 「大日本帝国の興亡」 ニューヨーク、ニューヨーク : Modern Library. p. 746

²⁷ トーランド p.700

²⁸ W・ウィルソン(2013) 「爆弾は日本を屈服させなかった。スターリンが屈服させた」(70年間の核政策は嘘の前提の上に築き上げられていたのか。)

<https://foreignpolicy.com/2013/05/30/the-bomb-didnt-beat-japan-stalin-did/>

Hasegawa, T. (2011). Soviet policy toward Japan during World War II. *Cahiers du monde russe* 52: 245-271. <http://journals.openedition.org/monderusse/9333> 帝国陸軍参謀本部は明らかにソ連の極東での戦力増強を知っていたが、ソ連が侵入してきたときに、参謀本部と関東軍は全く不意を突かれた。不意打ちと受け取ったのは、ソ連は1945年5月に日ソ中立条約の延長を拒否されていたが、条約は1946年まで有効だったからであろう。

Drea, E.J. (1984). Missing intentions: Japanese intelligence and the Soviet invasion of Manchuria, 1945. *Military Affairs*. 48: 66-73. https://www.jstor.org/stable/1987650?seq=1#page_scan_tab_contents

もう一つ、米国が原爆を投下したことを間接的に正当化する口実になりそうな歴史的な問題がある。日本は粗野かつ無責任な態度で、ポツダム宣言を受諾することを拒絶した。宣言の中に述べられていたのは、レイに言わせれば、「建設的な民主主義の保証」だった。日本がそれを受け入れなかった事実を忘れてはならないというわけだ。ポツダム宣言は「民主的傾向」と「基本的人権」を実現することを誓約していた。レイは、さらに進んで、「米軍は日本を占領して、この誓約を履行することにより、世界の歴史上かつてなかった、寛大かつ民主的な軍による占領を実現す」と述べた。ポツダム宣言を拒絶したから原爆が投下されたと言いたいのだ。レイは、日本の軍部と天皇が全ての責任を負うべきだと主張する。ここで面白いのは、レイがポツダム宣言と降伏と米軍の占領を「建設的」なものだと評価し、さらにまた、「世界の歴史上かつてなかった、寛大かつ民主的な軍による占領」とまで言っていることだ。性善説に溺れてはいけぬ。現実はそのようなものではなかった。米軍が日本に到着すると、たちまちレイプが始まった。「沖縄やサイパン」²⁹の例を見れば、こうなることは分かり切っていたのだ。

京浜地区では、10日間のうちに、1000件のレイプが報告された。レイプされるのは恥だから、貞淑な女性は泣き寝入りをする。実際のレイプの件数はこの10倍（10000件）になるだろうと推定されている。³⁰悲惨なことに、多数のレイプ被害者が自殺した。名古屋では、GIは犯行に着手する前に、手間を惜まずに電話線を切断していた。³¹レイプを止めようとした日本人は逮捕された—米兵がレイプをしたと人に語った者は逮捕され強制労働の判決を受けた。「占領軍を誹謗する噂を流した」という咎であった。³²この問題を報じようとした新聞は発行停止処分を受けた。タテマエとしては、占領軍から「言論の自由」が認められていたのだが、その実態はといえば、「他社の新聞が検閲を受けた」と報じただけで、自社が検閲の対象となり、結局は同じように発行停止に追い込まれるのだった。³³あらゆる形態の報道も通信も「厳しく制限され検閲された」。³⁴新しく誕生した民主日本では、国旗を掲揚するだけで犯罪になるのだった。

アメリカ政府のある人物が言っている「もしいかなる時でもソ連が参戦してくるということになったら、すべての日本人は敗北が決定的なことを認識しただろう。」（Goodrich, p.180）；「トルーマンはソ連の参戦は日本の降伏を誘発することを認識していた。」「スターリンは8月15日に日本へ侵入するだろう。それにより日本はおしまいである。」（Goodrich, p.184; Lifton & Mitchel, p.273; Toland, p.633-638.

²⁹ Goodrich, p. 227.

³⁰ Goodrich, p. 227

³¹ Goodrich, p. 229.

³² Goodrich, p. 230.

³³ Goodrich, p. 230

³⁴ Goodrich, p. 234; Lifton & Mitchell, p. 56, 58, 59.

米軍は犯罪を犯し、日本人は不満を持つ。そればかりではなかった。広島・長崎への核攻撃に関する報道は、日本人の目には触れないように規制された。占領軍はジャーナリストが広島・長崎に入ることを禁止した。禁を破った外国人ジャーナリストは日本から追放された。広島・長崎に関する郵便物や写真は押収され、破却された。写真も映画も没収され、「最高機密」として日の目を見ないようにマルヒ(秘)扱いになった。目撃者は証言することを禁じられ、犠牲者を追悼することさえ許されなかった。³⁵犠牲者が徐々に肉体を蝕ばまれて死んで行く様子を描いた報道は、どんなものであれ、占領軍当局から「プロパガンダ」という烙印を押されることになった。

すでに述べたように、本書は、日本への原爆投下に関する米国人の態度について言及しようとはしない。しかし、それにも劣らず唾然とさせられることがある。第二次世界大戦の間、および原爆投下後にも、米国人の考え方が一向に変わろうとしなかったことである——米国は国際的民主主義の先駆者であり、世界の民主主義の守護者であり、銃剣に訴えてでも世界各国に民主主義を教えてやるのだという信念を変えていないということである。本書の根柢になっている歴史観は、米国が具現した第二次世界大戦の教訓である。それは決して、「人類は長期に互る政治問題を解決するために武力を使う必要はない」という教訓ではない。逆に、「『自由』と『民主主義』を世界に普及させるという大義名分があれば、暴力に訴えてもかまわない」という教訓である。第二次世界大戦後にも、米軍は数限りなく軍事的冒険を行って来た。うべなるかな、米国人はこの教訓を心に刻みつけているのである。

さる退役軍人のジャーナリストは、北アフリカと太平洋で従軍したが、終ったばかりの戦争を評し、また、米国が世界の警察官である必要性について論じ、次のように言っている。

国際的な問題に関して、我々米国人は危険な考え方に陥る傾向を持っている。他国に対して、「俺たちの方がおまえたちよりも正義なのだ」という考えである。米国人の方が世界の諸国民よりも高貴で気品ある存在だと思ってしまうのである。したがって、何が正しくて、何が間違っているかということについても、正しく判断できる立場にあると言いたいのだ。「俺たちがどんな戦いをして来たか民間人は思っているんだ。戦わなかったくせに偉そうなことを言うな」

我々は冷然として捕虜を射殺し、病院を爆撃し、救命艇に機銃掃射を浴びせ、敵の民間人を殺害し虐待し、敵の負傷者を始末し、まだ生きている敵を死んだ者と一緒に穴に埋めた。太平洋では、敵兵の頭蓋骨を磨いて、テーブルの装飾品としてガールフレンドにプレゼントした。さらには、敵兵の骨を削ってペーパーナイフにした。そして、その残虐行為が頂点に達したのが、無防備同然の両都市に

³⁵ Goodrich, p. 239.

原爆を投下して、敵の民間人を焼き殺したことだ。一瞬にして行われた大虐殺という点では、世界の歴史に冠たるものと言わなければならない。³⁶

³⁶ Jones, E.L. (1946.) One war is enough. *The Atlantic Monthly* 177: 48-53.